

『新作歌劇 1983 (ich-kyu-hachi-san) 01.09.02』鑑賞レポート

text by KRAFT.WARTZ

kashi no kai

(国立オペラ・カンパニー 青いサカナ団 第20回公演)

誰にだって、夢見ることが仕事だった時代がありました。

ティアラこうとう大ホール(東京都江東区)に於いて行われた国立オペラ・カンパニー青いサカナ団第20回公演新作歌劇「1983(ichi-kyu-hachi-san)」に我らがかしぶち哲郎が出演した。平成13年9月2日のことである。

えっ！オペラ公演に出演？と聞いて、頭の中にはセリフの一言一言が世紀末的な大袈裟さに彩られつつ進行していくあのオペラかと正直構えてしまったが、かしぶち哲郎出演とくれば話は全く別で、むしろ興味がワクワク湧いてくるというもの。しかしムーンライダーズのメンバーの中でオペラという領域に一番近いポジションにいるとは言え、果たして今回の公演にどんな形で絡んでいるのか。音楽監督として？アクターとして？いや、音楽監督としてならば「出演」という表現はないだろうし、かと言って、ソプラノをわめき散らしながら登場するかしぶちさんはなかなか想像出来ないしなァ……………とかなんとか考えつつ歴史的瞬間を目に焼き付けようと公演会場に足を向けた次第。

会場のティアラこうとう大ホールは、オーケストラピットもある一階二階席合わせてキャパ1100余りのオーケストラ演奏に特化した施設である。因みにこのホールは東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、東京シティ・バレエ団と提携しているそう。環境はバッチリと言ったところか。

一階席ほぼ中央の座席に着くと、入口で配布された公演パンフレットにパラパラと目を通していくと、キャストが紹介されているページにたどり着いた。

そこには、

<特別出演>

Drums / かしぶち哲郎 (ムーンライダーズ)

Guitar / 西池 崇 (セロファン)

E.Bass / 河野 薫 (セロファン)

と書かれていた。

ほう、かしぶちさんはドラマーとして出演か、ええとギターとベースもいるのか。んー、ミュージシャンとして出演するのか？オペラに対する浅薄な知識故に、いま一つシチュエーションを理解出来なかったのであるが、芸術監督の神田慶一氏が今作を紹介するページがあったので覗いてみると、今作を「オペラ」と言えるのか？という根元的な問いかけを自ら呈していてビックリ。さらにこの作品にはクラシック以外の要素つまりポップス、ロックの要素が多分に含まれていること、実際舞台にはロックバンドが登場する云々と言った「いわゆるオペラ」らしからぬ作品であるということが紹介されていてまたビックリ。肩を張らずに楽しめるオペラオペラしていないオペラにますます興味が湧いてきたのであった。

さて、歌劇「1983 (ichi-kyu-hachi-san)」について触れておこう。この作品は二部構成で、一部が2章仕立ての展開となっている。物語はクラシック・スタイルのオーケストラの演奏に合唱団が加わるオールドスタイルのミュージカルの撮影シーンの中、撮影監督であるツトムが突如大声で撮影中止を宣言する所から始まる。音楽が彼の意図に合わないのである。

助監督は様々な音楽家を集めてくるが、ツトムはその中にアコースティック・ギターを抱えたハルキという人物と出会うことになる。実はこのハルキはツトムが10代半ばと一緒にバンドを組んでいた幼馴染みの1人であった。二人は昔話や近況で盛り上がるが、ハルキは今回の仕事については少し考えさせてくれと言い、スタジオを去る。

1人残ったツトムがギターを抱えていると暗闇で誰もいないはずのスタジオの片隅にギターを抱えた少年が現れた。そこはツトムが10代の頃に仲間達と組んでいたバンドが練習に明け暮れていた倉庫であった。組んでいたバンドでツトムはギターを担当していたがその下手さに「脱退」を促されていた。何とかバンドに残りたいと少年ツトムは懇願するが、結局バンドのプロモーション・ビデオの撮影を任されることになる。ハルキはバンドに加えてもらえないが、いざギターを手にするとあまりの上手さに仲間達は演奏を止めてしまう。

この倉庫で工場の従業員達と少年達による「昼休みセッション」が繰り広げられるが、そこへ涙を拭いながら少年達の憧れでもあるマリアが駆け込んで来た。マリアの恋人ユウジは札付きの「ワル」でマリアを怪しいクラブで働かせているという。少年達はマリアを救出しようと、クラブに入り込む。しかし、少年達はアットという間に大勢の黒服達に捕まえられてしまう。もうダメかと思ったところへ、倉庫の工場長とその仲間が助けに来る。マリアと少年達は無我夢中で倉庫へ逃げ帰ってくるが、「余計なことしないでよ！」とマリアの言葉に少年達は言葉を失う。そんなマリアに大人のツトムが「今の自分を見つめる勇気を」語りかける。

気がつくと、大人のツトムは見慣れた撮影スタジオのディレクターズ・チェアに腰をおろしていた。助監督が「僕たちの証」と下手くそな文字で書かれた一本の8ミリ・フィルムを手に駆けつける。そこへハルキがやってきて、2人が決して忘れることのないいつかみた「風景」を目の当たりにする。そして、舞台は再び撮影が中止されていた冒頭のミュージカルの撮影シーンへ戻り、クライマックスを迎える…。

我らがかしぶち哲郎の登場シーンは2回、休憩をはさみ第二部の冒頭と、クライマックスのミュージカルの撮影シーンであった。まず登場したのはマリアが恋人ユウジに強制的に働かされていた怪しいクラブでのシーンだ。このクラブの「売り」は、美人ウエイトレス達のダンス・ショーと、芸達者なバンドマンの生演奏なのであるが、かしぶち哲郎は、その芸達者なバンドマンとして登場した。

その日のクラブではダンス・ショーが盛り上がり、クラブの歌姫である女性シンガーがソウルフルな歌を熱唱したり、ミラーボールが煌びやかなチーク・タイムありと、緩急取り混ぜた楽曲で「フィーバー」していた。即席のバンドは、舞台のやや後ろながらど真ん中に位置。かしぶち哲郎を真ん中にしてステージ向かって左手にセロファンのベース河野氏、右手に同じくギターの西池氏という陣形。特に西池氏はタップがあるんで、非常に目立っていたように感じられた。登場の瞬間、会場から黄色い歓声が確認出来た。

2度目の登場は、クライマックスを飾るミュージカルの撮影シーン。かしぶちカウントを皮切りに、サンバのリズムが場内を包み込んだ。あれよあれよという間にボルテージは最高潮に達し、舞台のいたるところから出演者が飛び出してくる。舞台のフィナーレはかしぶちドラムが炸裂していた。

それにしてもフル・オーケストラの生演奏とバンド演奏とのリンケージは実に見応えがあった。オーケストラピットにいる指揮者と舞台上のドラマーとの物理的な立ち位置からして、指揮棒に合わせてなんてことがそもそも無理があると思うし、別にお互いヘッドホンをしてクリック音を聞いていたワケでもないし、このあたりのスリル感が実にハラハラドキドキで、今作品一番の醍醐味ではなかったか。こんなこと書いてると、青いサカナ団からナニを見てたんだ！なんて文句が来そうなんだけど。

その国立オペラ・カンパニー青いサカナ団について紹介しておこうと思う。この劇団は1989年に現芸術監督の神田慶一氏を中心に、国立（くにたち）音楽大学の学生とOBを主要メンバーに結成され、1990年に創作オペラ『壁』（保坂文昭作曲）を発表、活動を開始した劇団で、スタンダード・オペラの新解釈、現代オペラの発掘・紹介、さらに日本語のオリジナル・オペラの創作・上演（これまで上演されてきたオリジナル作

品は市民参加が特徴)を柱としている。今回の新作歌劇1983にも一般の小学生からOL、定年を迎えた人まで幅広く登場している。また今年2001年は更に飛躍すべく、スタッフ陣、キャスト陣を一新し、冒険性・実験性に富んだ舞台作りを実現すべく準備中という創立12年目を迎える劇団である。

今回の作品は、貴方が自分の少年(少女)と話をする機会に恵まれたら彼(彼女)に何を語りかけるのか?そして自分が少年(少女)だった時にどんな「夢」を見ていたのかを、ツトムとハルキを通して問いかける物語なのだが、これは同時に芸術監督神田慶一氏自身の年代記にもなっているという。実際、1983年当時高校生だった彼はロック・ミュージシャンに憧れを抱き、バンドを結成し、何も見えない暗闇の未来に向かって唄を歌い続けていたようだ。その誰もが抱いていた「夢」について堂々と問い直して見るのが、今作品のモチーフになったということだ。

因みに1983年のムーンライダーズと言えば、その前年に問題作『マニラ・マニエラ』を自ら封印し、速攻で『青空百景』をリリース、新作となる『アマチュア・アカデミー』まで、メンバーはソロ活動を精力的に行っていた時期だ。その結果と言うわけでもないだろうが、かしぶち哲郎はファースト・ソロアルバム『リラのホテル』をリリースすることになる。強引かも知れないが『マニラ・マニエラ』の封印事件はライダーズに暗闇の未来を予感させ、それを振り払うようにもの凄い速さで『青空百景』をリリースし、さらにレコード会社を移籍し、膨大なレコーディング時間を費やして『アマチュア・アカデミー』を完成させる。これは冒頭のミュージカルの撮影シーンで、音楽的な意図が合わずに撮影監督のツトムが撮影の中止宣言をしてしまうが、結局フィナーレでは納得の行く撮影を行いクライマックスを迎えるという舞台の展開と似ているような気がするのだが。

長くなった。

芸術監督の名前にも思わずニヤリとした向きも多いと思うが、何よりも親近感を覚えたのは劇団が冒険性・実験性に富んだ舞台作りを目指しているという点であった。やはり「慶一」という司令塔がいる集団はとかくその戦略性が似てくるものなのか妙に納得してしまった。あっ、そうそう、最後カーテンコールの際のかしぶち、西池、河野の3名は、お茶目に仲良く手を繋いで小走りに登場。あの出方は若干ポカスカジャンが入っていたかも知れないかな。

是非とも再演を。

(櫻の会 KRAFT.WARTZ 01.09.10 up)